支配の教壇

～純情無垢な女教師たち～

著 黒瀧糸由

画 水島☆多也
梅島うりり

PB オトナ文庫

鹿島理沙子
risako kashima
真面目で学生思いの美人教師。凜とした立ち振る舞いとひたむきな態度から、学園内の誰もが憧れる存在。学生時代に勉強漬けだったせいで、流行の察知に鈍感であったり、世俗的な知識に疎い。
滝沢萌果
moeka takizawa
明朗快活な女性教師。小柄な体に不釣り合いな巨乳の持ち主。子どもっぽい外見は自他ともに認めており、特に不満もないが、心の奥底では『大人の女性』らしさに強い憧れを抱いている。

プロローグ　二匹の奴隷

数年前に創設された藤柳学園の普通教室。椅子に座る男子学生に、全裸の女性が足を淫らに大きく広げて跨がっていた。

「アフッ！　あふぅぅ！　気持ちい、いいっ！　ご主人様……あぁ……」

根元まで男根を呑み込み、女性は男子学生に抱きつきながら身体をくねらせる。腰を動かし自らの淫裂へと何度も何度も尖った肉棒を突き挿れ、淫蜜を溢れさせた。溢れているのは淫蜜だけではない。大人の頭ほどもありそうな巨大な乳房の先端からも白い液体が漏れ、女性の柔肌を濡らしている。

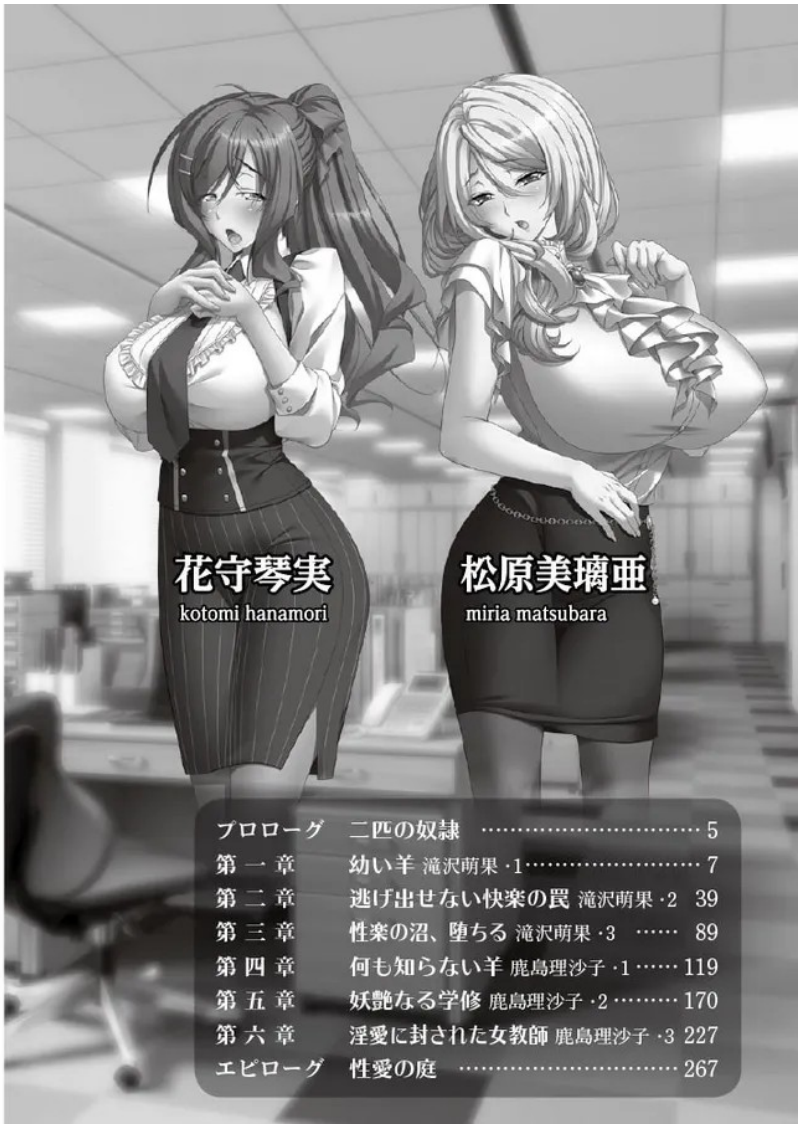
「ンッ！　あぁぁっ……はふっ、ふあぁァッ！　オチンポぉ、オチンポ気持ちいい！」

「ふっ……。すっかりチンポの味を覚えちまったな。ええ？　松原先生？」

快感に表情を歪ませる女性は学園の教師「松原美璃亜」。学園理事長と父親が昵懇なため横暴な態度を取り続け、学生からも一部教師からも「女帝」と怖れられている。

そんな美璃亜も彼の前では肉欲を貪欲に求める肉奴隷でしかなかった。

男子学生の名前は「坂下吉之」。妖しげな笑みを浮かべ、快感によがる女教師を眺めている。彼に隷属しているのは美璃亜だけではない。



プロローグ　二匹の奴隷 …… 5
第一章　幼い羊 滝沢萌果・1 …… 7
第二章　逃げ出せない快楽の罠 滝沢萌果・2　39
第三章　性楽の沼、堕ちる 滝沢萌果・3 …… 89
第四章　何も知らない羊 鹿島理沙子・1 …… 119
第五章　妖艶なる学修 鹿島理沙子・2 …… 170
第六章　淫愛に封された女教師 鹿島理沙子・3　227
エピローグ　性愛の庭 …… 267

「アッ……あふぅ……松原先生ぃ……気持ち良さそう……あっ……あぁぁ……」
激しく蠢く美璃亜の痴態を見つめながら、全裸の女性が自分の股間を激しく愛撫していた。ぱっくりと開いた裂け目からは、止めどなく淫汁が漏れ、足下には大量の淫水溜まりができあがっていた。
「琴実はそのままオナニーをしてろ。気が向いたら指でも挿れてやる」
「ひうっ……。そんなぁ、私も……私もぉ……オチンポ欲しいです……ご主人様ぁ」
残酷なお預けに花守琴実は涙を流しながら、命じられた通りに自慰を続けた。ご主人様の気まぐれな「お情け」を期待して。
吉之は学園の問題児として教師や学生達には知られ、停学処分を受けたことがある。だが、その停学処分は学園側の都合によるものであり、吉之には冤罪だった。
普通の学生ならばその一事だけで退学したかもしれない。だが、吉之はそれをチャンスと捉え、琴実を騙してその処女を奪った。続いて横暴な態度を取ってきた美璃亜を脅迫して堕とし、快感漬けにしたのだ。
「あっ！　あっ……いく……イキます……ご主人様の……オチンポでぇ……くっ、くぅ！」
「ふあ……ふあぁ……。私もぉ……あ……だから次は私ぃ……私をぉぉ……！」
従順な奴隷と化した女教師達が、吉之に絶頂する様を同時に披露する。その姿を吉之は見つめながら冷笑を浮かべた。
「ふふ……こいつらで終わりじゃないぞ……」

第一章　幼い羊 滝沢萌果・1

放課後、吉之はグラウンドにいた。様々な部活が汗を流すなか、彼が関心を寄せたのは陸上部だった。
走り終えた女子達が、汗ばんだ身体のまま手足を伸ばしストレッチをしている。競技用の短パンは極めて短く、彼女達をオカズにしたい男子学生達はチラチラと視線を送っていた。
だが、オトナの女を好む吉之にとって彼女達は興味の対象外だ。
「はーい、お疲れ様ー！　みんないい感じだったよー！　でも、アドバイスあるから、ちょっと集まってー！」
ジャージ姿の女性が大きな声で部員達を呼び寄せた。一見すると学生達より幼い少女のようだが、藤柳学園の女教師「滝沢萌果」だった。
「お疲れ様ー。みんないい感じだったよー！　でもね身体の使い方が……」
陸上部顧問として身振り手振りでアドバイスをしているが、幼い容姿のせいで可愛らしく見えてしまう。部員は真剣に聞いているが、周囲は萌果を慈しむような目で見ている。
「ほう……」